「明治30年代　岐阜開拓期の子どもの着物」

＊『ところ文庫18　常呂町の昔話2』から抜粋・編集
明治31年に岐阜県から移住・入植した藤橋ワキさん・久保田末乃さん・内藤タメさんの会話をを編者／林不二夫さんがまとめたもの。会話には美濃弁が使われています。

（略）あんたの兄さんが誰かおんさらんかったかえ。
うん、コメさんという人が来て、土佐の学校へ行った。だから「弁当こしらえて持たせてやると、途中でケツ滑りをして着物を破って、弁当は途中で食べてしまうので、孫だと思って怒れば尻をまくって、叩いて逃げていくし、男の子はつくづく嫌になった」とお婆さんが話とった。昔は今のように服でなかったからねえ。かすりの着物を着て帯をぐるぐると丸めて着とったから、私どこの敏も3年生か4年生まで、遅くまで着物だった。
ああそうそう、終戦後、皆が服になったけど、その前は筒袖のかすりの着物じゃった。私どこの子どもたちも皆そうじゃった、着物ばかりだった。冬になるとストーブなどで焦がして前をべろーっと焼いてしまっていた。（略）

注：「土佐の学校」とは、常呂尋常小学校が土佐地区にあった明治35年7月から大正6年5月、現在地に建設・引っ越しするまでの期間を指す。